

松久淳 「羽田から恋人」もしくは「パンナムに恋人」

Would you like to ride in my beautiful balloon?

Would you like to glide in my beautiful balloon?

We could float among the stars together, you and I

For we can fly, we can fly

Up, up and away

My beautiful balloon, my beautiful balloon

私のすてきな気球に乗りたくない？

ファイイス・デイメンションの歌声に合わせて、ともに青い尾翼の  
エールフランスのエアバス300と、数年前に英国海外航空から名称  
を変えたブリテイッシュ・エアウェイズのボーイング707が、ゆっ  
くりと近づいてきて、鼻先でキスをするかのようにぴたりと止まる。  
すぐに整備員たちがタラップを設置すると、バレンシアガがデザイ  
ンしたパールピンクのサマースーツ姿のフランス人スチュワーデス  
たちと、青と白のスカーフを首にあしらった、同じくピンクのミニワ  
ンピース姿のイギリス人スチュワーデスたちが、タラップの階段をリ  
ズミカルに踊りながら降りてくる。

すでに滑走路で華麗に足を上げて踊っているのは、外出用の真っ赤  
なトレンチコートを着たコンチネンタル航空のスチュワーデスたち  
と、オレンジ地に縦の大きな白のラインが入った、トラペーズライン  
のミニワンピースで、同じオレンジ色の帽子を誇らしげに掲げている  
ユナイテッド航空のスチュワーデスたちだ。

彼女たちの間を縫うように、羽田の整備員たちと各国のパイロット  
たちが、交差しながら抜けてゆく。

向こうではノースウエスト航空機とスイス航空機が、ともに赤い尾  
翼ですれ違いつつ、それぞれ反対方向へと離陸していく。その後には、  
オレンジ色が斜めにあしらわれたカナダ太平洋航空のマクドネル・ダ  
グラスDC10と、濃紺の窓部分のラインの上は鮮やかな水色のKLM  
オランダ航空のダグラスDC8が滑走路をくるくると旋回してい  
る。

コンテナを下ろしたタグ車が走り込んでくる。その上でエキゾチッ  
クなダンスをしているのは、紫色のジャケットと長い麻のスカート姿  
の、ガルーダインドネシアのスチュワーデスたちと、民族衣装のサロ

ンケバヤを纏ったマレーシアーシングポール航空のステューデスたちだ。

赤い尾翼に白のカンガルーのシルエットのカンタス航空機と、青い尾翼に黄色の丸のルフトハンザ航空機が並んでやってきて、ぴたりと止まると同時にタラップ車が横づけされた。そこから花柄のロングスカートに、襟のぐつと開いた緑の長袖ブラウス姿のオーストラリア人ステューデスたちと、尾翼同様青と黄色の二種類のミニワンピース姿のドイツ人ステューデスたちが、くるくると舞いながら降りてくる。

各国のステューデスたちと、それを取り囲むように整備員やパイロット、そしてグランドホステスたちが壮観なダンスを見せる中、青空の向こうからひととき存在感を見せる機体が滑走路に着陸してくる。パナムのボーイング747だ。地球を模した青の円形の中の、PANAMのロゴはいつ見ても誇らしげだ。

取り付けられた左右6か所のタラップから、青のスーツと帽子、白のブラウスと手袋のおなじみの姿のステューデスたちが、一斉に滑走路へと躍り出る。彼女たちはすばやくターンしながら、三つのグループに分かれ、各国のステューデスたちの輪に混ざっていく。そして全員が見事に同じダンスを披露し始める。

だって私たちは飛べるんだもの！ 高く高くずっと遠くへ！

The world's a nicer place in my beautiful balloon

It wears a nicer face in my beautiful balloon

We can sing a song and sail along the silver sky

For we can fly, we can fly

Up, up and away

My beautiful balloon, my beautiful balloon

小巻は、羽田空港の展望デッキに佇んでいた。

実際はまだ朝が早いせいか日航機とユナイテッド機とパナム機くらいしか駐機していない。しかし「Up, up and away」を口ずさみながら、ターミナルやエプロン、滑走路などを見ると、各国の飛行機やステューデスたちが、カラフルに踊る様をいつも夢想してしまう。

1976年12月11日。安東小巻（あんどうこまき）は20歳の誕生日を迎えた。

今日は大事な仕事の日でもあるが、そんな日だからこそ、早起きをして羽田空港にやってきた。

羽田空港の展望デッキは、小巻がもつと愛する場所だ。今日のように誕生日などの記念日、大事な用事がある日だけでなく、嬉しいことがあったときも、逆に気分が落ち込んでいるときでも、時間があれば赤坂の自宅マンションを出て、浜松町からモノレールに乗る。

ターミナルデッキではなく、出発ロビー左端から階段を上がって外に出る見学デッキのほうで、様々な飛行機やスチュワーデスたちを見られるので、小巻はとくに好きだった。

12月の風が冷たい。

小巻は真つ赤なカーディガンとチャコールグレーの膝上のペンシルスカートの上に着た、英国調の赤のタータンチェックの少し大きめなコートのポケットに手を入れて、体をきゅっと縮こませた。

羽田空港はますます増加する便数と、ボーイング747など大型化する機体のためにパンク寸前で、再来年には国際線のほとんどが、千葉県成田の開業する新空港に移ってしまう。小巻はそのニュースに溜息が出るほど落胆した。私の好きな羽田空港が、世界中の人々が集まって、人々が世界中に旅立っていく羽田空港が、まさかその姿を変えてしまうなんて。

そのとき、そんな寂しい気持ち振り払うかのように、小巻は思わず「わあ」と小さな歓声をあげた。

搭乗が終わったパンナムのボーイング747が、ボーイングカーに押されてゆつくりと後ろへと動き出したのだ。

やがて所定位置に着くと、トーイングカーと整備員たちは離れ、機体は自ら前へ進み始めた。左へ一度、さらに左へ一度、ずつとまっすぐに進んでから、右へ一度、さらに右へもう一度旋回と、長い時間をかけて滑走路のスタート地点へとたどり着いた。

管制からの指示が出たのだろう。走り出した機体は一気にスピードを上げた。

あの飛行機はどこへ行くのだろう。ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴ、それともハワイ。小巻はそんなことを想像しただけで、なんとも言えない幸せな気分を味わう。

パンナムのロゴが、右斜め上に傾いた。重そうな機体は、先端を上へ向け、徐々に滑走路から離れていった。そしてキーンという高音と、

ゴーという重低音を空港中に轟かせて、羽田沖へと飛び立っていった。小巻は、その尾翼が青空の中に完全に吸い込まれていくまで、いつまでも見つめていた。

そして「よし」と小さく呟いた。今日は、いよいよひとつの夢が実現する日。そのために、何日も何日も一人で練習もしてきた。小巻は大きく息を吐いて、心の中で「がんばらなくちゃ」と自分に言い聞かせた。

そして「Up, up and away」を口笛で吹きながら、颯爽とモノレール乗り場へと向かった。

Suspended under a twilight canopy

We'll search the clouds for a star to guide us

If by some chance you find yourself loving me

We, I'll find a cloud to hide us, keep the moon beside us

どんな夢を見ていたのか目が覚めた瞬間に忘れてしまった。ただ、やけにカラフルで楽しげな夢だった。そして、その中で「Up, up and away」が流れていた気がする。

いや、そうじゃない。

松崎公生（まつぎさきみお）は寝返りを打って、反対のほうへ耳を向けた。夢ではなく部屋には実際に、小さな音で「Up, up and away」が流れていた。

昨夜、いつものように「ジェットストリーム」をボリューム1で流しながら眠った。オープニングナレーションの「遠い地平線が消えて、深々とした夜の闇に心を休めるとき、はるか雲海の上を音もなく流れる気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています」という城達也の名調子から、いつもだいたい3曲目には眠りに落ちてしまう。

フィフス・デイメンションはつけっぱなしのFM東京の朝の番組の選曲だった。何のCMソングだっただろうか。確かトランス・ワールド航空だったと思うが、記憶は定かではない。そもそもそのCMは日本でも放送されていたのだろうか。

起き上がって、日立ローディーのステレオに手をかけた。イジェクトボタンを押して、セルジオ・メンデスのLPレコードをダビングした、マクセルのカセットテープを取り出す。A面の最後で終わったままなので、B面にひっくり返して再生ボタンを押そうとしたが、そこでラジオの曲が「Up, up and away」から、流麗なストリングスの前

奏に変わった。バリー・ホワイトのラブ・アンリミテッド・オーケストラ「愛のテーマ」だ。公生はそのままでもリユームを上げた。

伸びとあくびをひとつすると、オレンジとグレイの幾何学柄のカーテンを開けた。冷氣と同時に朝の光が差し込んでくる。「愛のテーマ」をCMに使っているキャセイ・パシフィックではないのが残念だったが、タイミングよくパナムのボーイング747が大空へと飛び去っていくところだった。都心の各スタジオにはあまりアクセスはよくないが、この景色のために、本羽田にアパートを借りているようなものだ。

それにしても12月の朝はさすがに寒い。

公生は今日、30歳になる。

パナム機を見送ってから、顔を洗って歯を磨き、ウレタンプラスチックの丸椅子に座ってインスタントコーヒーを飲んで、ハイライトに火をつけた。

壁のラックにはLPレコードや本も多いが、いちばんスペースを占めているのはアテレコの台本だ。自分の出演作品以外にもたくさんあり、同業の友人たちからは「東北新社の倉庫の次にあるんじゃないか」と笑われるくらいの冊数をコレクションしている。

ラジオがトーク番組に変わったのでローディーのスイッチを切り、パナカライクイントリックスのテレビをつけた。日本テレビの子供番組が映ったが、公生は小さく舌打ちをした。昨今ずっと調子が悪く、画面の下の方に2センチほどの走査線が歪んでいたが、ついにそれがもう1本増えてしまっていた。

テレビの上部をパンパンと叩くと、一瞬だけ上の線は消えたが、またゆっくりと歪んでいった。だましまし使ってきたが、そろそろ限界が近そうだった。

公生はこれから何本分の仕事で新しいテレビを買えるだろうかとざっと計算して溜息をついてから、部屋を出てグレイのスバル1000に乗り込んだ。ハイライトに火をつけてからアクセルを踏み込み、住宅街から第一京浜へと車を走らせた。



公生が番町のスタジオに入ると、入ってすぐ右側の待合室ではなく、次の副調整室のさらに奥の録音スペースのほうから笑い声と数人の

ざわめきが聞こえてきた。開け閉めが面倒なので、本番以外ときは防音扉に畳んだダンボールが差し込まれて、開けっ放しにしていることが多い。

〇〇平米ほどの床張りの部屋の、奥の壁にテレビモニターが一台置かれていて、それに向かつてスタンドマイクが3本立っている。その反対側は大きなガラス窓になっていて、その向こうはミキシングコンソールなど録音機材に埋め尽くされた副調整室だ。残った二つの壁側にはパイプ椅子が置かれていて、出番のない声優たちは各々ここに座ってスタンバイをする。

先に来ている皆は、二つのグループに分かれて世間話をしたり、台本をチェックしていたりしていた。

公生は馴染みの顔が多いほうの一角で談笑している面子をざっと見渡し、すぐそこに、初対面の若い女がいることに気づいた。噂はよく聞いていたし、なんせ台本には名前がクレジットされているのだから、それが新人声優の安東小巻だということはすぐにわかった。

しかし、人にはそんな素振りは見せないようにしているが、極度の人見知りの公生は声をかけるどころか、つい目を背けてしまった。

小巻は初めて出会う先輩声優に気づき、すぐに笑顔を作ってすっと立ち上がった。

「ハムさん、ござっす」

先に、今日の吹き替えで主人公の男の子を演じる、若手の塩田サトルが、いつものように雑な挨拶をした。

公生は公という漢字をバラして、業界内では「ハム」というあだ名で呼ばれていて、それは後輩たちにも受け継がれている。

続いて、プロデューサーの山ノ内が手を挙げ、翻訳の疋田やや子、先輩声優の三木三郎が声をかけた。長年現場がよく重なる4歳年下の清村恵美も、につこりと微笑みかけた。

「松崎さん、はじめまして。私」

小巻は皆の挨拶が終わるのを見計らって頭を下げようとした。公生は思った以上に若く可愛らしい容姿の小巻に、すでに緊張していた。するとタイミングが良かったのか悪かったのか、そのときスピーカー越しに「ハムちゃん、よろしく」と声がした。振り向くと、ガラスの向こうの副調整室からディレクターの八重樫と、ミキサの笹倉が同時に挨拶がわりに人差し指を振った。

公生がそちらに指を振り返したので、小巻は自己紹介が中途半端になってしまい、もう一度最初から始めようかと思った。しかし、その

様子をわかりながらも照れ臭さが勝り、公生は皆に言った。

「あれ、俺より先に奴、来てたりするの？」

「奴？」

まだ23歳だが、子役から活躍していてどんな先輩にも物怖じしない塩田が聞いた。すると恵美がおかしそうに言った。

「すごい、ハムさんなんでわかったの？」

公生はくんと鼻を動かしてみせた。皆が吸っている煙草の中に、フランスのダビドフの匂いが混ざっていた。

「このくっさい煙草。こんなの吸う奴、他に誰がいるよ」

「わたくしだけよねえ、それ」

後ろから声がした。すると、何という模様と表現したらいいのかわからない、派手なレーヨンのシャツにパンタロンという格好の、四ツ木不二夫が腰をくねくねとさせながらやってきた。公生のひとつ年上だが、同業者でもっとも仲が良い。

「トイレ中でもわかつちやうなんて、ハムつたらわたくしが好きすぎ」

四ツ木はそう言うと、後ろから公生の腰に抱きついた。そして右腕の間からゆつと顔突き出すと、そこにいる小巻に目をやった。

「ハム、こまちちゃんは？」

「い、いや」

公生はそつけなく言った。すると立ったままだった小巻は、また頭を下げ、ようやく挨拶をすることができた。

「安東小巻です。今日はよろしくお願いいたします」

「ああ、はい」

公生は興味のないふりを装って頷いた。

出会うまで、公生はこの新人声優に対してあまりいい印象を持っていなかった。外語大の女子大生で英語は堪能、入学時にその語学力とルックスを買われて、テレビの情報番組で海外ニュースを伝えるコーナーのアシスタントにスカウトされた。本人は子供のころから洋画の吹き替えの声優に憧れていて、昨今この仕事も始めるようになった。業界としても、そんなめずらしい経歴の可愛い女の子を、プッシュしているという気運になっている。

お嬢さんの趣味でこの仕事をやられちゃかなわないんだよ。まだ実際の演技を見ていない公生は、小巻の噂を聞くにつけ、そんな風に思っていたのが正直なところだった。

こうして面と向かってみると、なるほど、業界の先輩たちも製作陣たちも、彼女を可愛がりたくなる気持ちもわかる。きつと育ちもいい

のだろう。曇りのない愛想の良さを持っている。だが結局、大事なのは吹き替えにおける演技力とスキルだ。

「こまちゃん、可愛いわよねえ」

「可愛いし、すっごいおしゃれだし」

「そんなそんな」

不二夫に続いて恵美もうんうんと頷き、小巻は恥ずかしそうに首を小さく横に振った。公生はその流れで、小巻に対する言葉を求められるのがいやで、平然を装って話を変えた。

「ところで、なんで今日やっこさん？」

公生は不二夫をヘッドロックのように抱えたまま、疋田に聞いた。疋田はまだ30歳だがアメリカの映画やドラマの吹き替えの翻訳ではいちばんの仕事量をこなしているベテランだ。しかし今日の収録はイタリア映画で、違う翻訳家のはずだった。

「ハム、何言ってるのよ」

疋田本人や山ノ内より前に、不二夫が口を尖らせた。

「イタリア語の先生が訳した後で、台本にしたのやっこさんよ」

「ああ」

そういうことか、という意味で公生は頷いた。吹き替えはたんなる翻訳だけでなく、最終的に芝居の言葉にしなければならず、さらに、オリジナルの人物の口の動きに極力合わせなければならない。疋田が重宝されるのは、声優が喋りやすいリズムと文字数で台詞を作るからでもある。

小巻は緊張しながらも、皆のやりとりをにこにこ見ていた。公生はそんな小巻の表情と、スカートから伸びるきれいな足を、ときどき視線の端で盗み見ていた。

今日収録する「水曜洋画シアター」で放映される映画は、原題はヒロインの名前の「リリアーナ」で、5年前に『あの夏の声』という邦題で日本で公開されていた。イタリアでヒットを記録し、続編『君の声を探して』も作られていて、こちらも3年前に日本公開されていた。夏のナポリを舞台に、事情があつてこの地にやってきたリリアーナと、彼女に憧れる地元の少年の話。少年と大人の女という設定だと、この数年でも、同じくイタリアなら『青い体験』というお色気映画が大ヒットしていたし、シリアスものでもアメリカ映画『おもいで夏』もあった。

ただ、この『あの夏の声』が、とくに公生たちにとっては興味を引

く設定なのは、ストーリー自体が「吹き替え」をテーマにしていることだった。

日本では海外の映画は、映画館では字幕で上映され、テレビ放映のときに日本語吹き替え版が放映される。しかしイタリアでは、映画館の段階で、イタリア語に吹き替えられているのが普通だ。

いつも友人たちと映画館に入り浸っているアルマンド。彼はあるとき、SF映画だろうが恋愛映画だろうが、ある同じ女性声優がいろいろな役を演じていることに気づいていた。

そんなある日、アルマンドは街角で偶然「その声」を聞く。そこには垢抜けた大人の女性がいた。その日以来、アルマンドはその声優、リリアーナに恋い焦がれ、やがて知り合って仲を深めてゆく。

小巻は、この作品で初めての主演、リリアーナ役に抜擢された。

リリアーナの素の部分だけでなく、アメリカ映画やフランス映画の女優を吹き替える声優としてのリリアーナのシーンも演じなければならぬ。普通だったら小巻のようなまだ脇役しか経験のない新人ではなく、達者なベテランがキャスティングされるところだが、リリアーナ役の女優はまだ日本では知られていなくてイメージが定着していないから、吹き替えもフレッシュな人選をしようという意図と、小巻をスターにしていこうという局の意向が重なったの大抜擢となった。

公生はそのリリアーナの恋人で、同じくイタリアの声優で、後にハリウッドの実写映画に抜擢されるエットーレを演じる。つまり小巻同様、エットーレが吹き替える映画の役も担当することになる。

「ではよきところで一度、通します。皆さんおののスタンバイで」少年役の一人、野々村広大が「お待たせしました」とスタジオに駆け込んできて全員が揃うと、副調整室から八重樫が声をかけた。吹き替えの現場を知らない人は必ず驚くのだが、リハースルは一度しか行われぬ。本編を止めずに流し、声優たちは入れ替わりマイクの前に立って演じる。それで本人も口を合わせるタイミングをつかみ、さらに終了後にディレクターと翻訳家がチェックした点をそれぞれに伝えると、その次はすぐに本番となる。

小巻は、どうしても足が震えてしまうのを、ときどき音を立てないように足踏みをすることだ何とか堪え、マイクの前に立った。まず演じるのは、アルマンドたちが見ている映画に映る、アメリカやフランスの女優たちの声を吹き替えている、リリアーナの声だ。隣に公生

が立ち、その女優たちの相手役を吹き替えるエットーレに声をあてた。  
パニック映画。

「待って、神父さんは私たちをかばってくれたの！」

「いいんだキャサリン。ありがとう」  
スパイ映画。

「さて、そろそろ君たちが何を隠しているのか、教えてもらおうかな」  
「慌てないで。その前に、一杯いかがかしら」

ロマンス映画。

「もう僕は何をやったってダメなんだよ」

「いいかげんにして！ 彼女なら海岸よ。早く行ってあげて」

小巻は自分で、どんな声が出ているのかがわかつていなかった。ス  
タッフや他の先輩声優たちが納得するような演技ができていいのか  
もわからない。家では何十回と繰り返し練習し、カセットテープに吹  
き込んで自分でも聞き返してみたりもしたが、いったい何が正解なの  
かも、自分ではよくわからなかった。

塩田演じるアルマンドと、不二夫のニーノ、野々村のエンニオの少  
年三人組のシーンが続くタイミングで、小巻はそつと戻ってパイプ椅  
子に腰かけた。誰も、良かったよという顔も、なんてへたくそなんだ  
という目も向けなかった。全員がモニターに集中し、皆の芝居に集中  
している。さきほどあれだけふざけていた不二夫も、まるで睨みつけ  
るかのように厳しい表情でモニターを見つめている。

ふと向かいに座った公生を見ると、一瞬目が合った。さつきは会話  
らしい会話もできないままで終わったが、今回もすぐに目を逸らされ  
た。気難しい人なのかしら、いまのやりとりに、怒ってないかしらと  
不安になったが、しかしいまはそれどころではなかった。すぐに次の  
出番に集中するために、台本に目を落とした。

「007の新作なら、来月からだ」

映画館主役の三木三郎がつっけんどんに言い、イタリアの少年にな  
りきっている不二夫たちが歓声をあげたり口笛を吹いたりした。

公生のほうはといえば、小巻の芝居に少し驚いていた。いまのここ  
ろ、「吹き替えの吹き替え」のシーンだけなので判断が難しいという  
のもあるが、お世辞にも小巻は声の出し方も口の合わせ方も上手とは  
言えなかった。しかし、それを補って余りある何かを持っていること  
は、間違いなかった。

しかもそれは、天性の才能などという実態のはつきりしないもので  
はなく、努力と練習の上に成り立っているものだった。そして、リリ

アーナが日本語を喋るとしたらこうなんだろうという説得力があった。

皆、若い女だからちやほやしてるだけじゃないんだと、公生は小巻に対する自分の思い込みと誤解を少し恥じた。そして先ほどふと目が合ってしまった、そのまっすぐな視線に照れていた。

「いまさらそんなこと言っちゃって」

「お願いだリリアーナ。どんなことをしてでも償う。だから僕と一緒にローマに戻ってくれ」

物語は終盤にさしかかっていた。公生はモニターの中で、小巻を抱きしめて必死に愛の言葉を囁いていた。やはり間違いない。小巻には人の心にきちんと届く「声」がある。そう思うと同時に、公生は惜しい気持ちが強くなっていた。その「声」があるからこそ、テクニクの稚拙さが目立ってしまう。

「私をもっと私をもっと若かったら、君に恋をしたと思う」

「僕をもっと大人になって、あなたと恋をしたいです」

「そのころ私、もうおばあちゃんよ」

映画のラスト、リリアーナは自分に恋をしてくれた少年アルマンドに、そう言って微笑みかけた。

モニターがぷつんと消え、スタジオ中の誰も大きく息を吐いて緊張を解いていった。しばらく誰も何も言わずに、小巻は不安に押しつぶされそうだった。やがて、不二夫が一際甲高い声で言った。

「こまちゃん、良かったじゃない、リリアーナちゃん可憐だったわ」  
そして台本を手に持ったまま、しなを作って顔の前でパチパチと拍手をした。

「私、新人のときにこんな度胸なかったなあ」

「映画どおり、こまちゃんの声、ずっと聞いてたかったねえ」

恵美が関心したように頷き、塩田が馴れ馴れしく小巻の右肩をとんとんと叩いた。小巻はふーっと大きく息を吐いてからにつこり笑った。「ありがとうございます。至らないところもいっぱいあったと思いますが」

「タイミング合わなかったところ、ちょっとあったわね」

疋田が注意点を書き込んでいた台本を、鉛筆でこつこつと叩いた。

「はい、申し訳ありません」

「でも確認したら大丈夫なくらいよ。ね？」

疋田は窓ガラスのほうに顔を向けた。

「やつこさんのチェックだけで、こっちはオッケー」

八重樫がスピーカー越しに言った。

「なんかお顔が可愛くて声まで良くてで憎ったらしいけど、初主演は合格点ね。ねえ、ハム」

不二夫が、黙ったままの公生に声をかけた。公生も、皆と同じように思っていたが、小巻の顔を見た瞬間、なぜか若い女をちやほやする男だと思われたくないという、ひねくれたスイッチが入ってしまった。「やつこさん、ブレスのズレ、パクっちゃったところ、ちよつとじゃないですよ」

公生のその言葉に、スタジオの空気が少し変わった。台詞を早く言い終わってしまい、元の俳優の口が無音で動いていることを、パクパクすることからパクると呼ぶ。確かに緊張のためか少し早口になってしまったところがあつたことは、小巻自身も自覚していた。

「申し訳ありませんでした」

小巻が頭を下げると、不二夫がすかさず口を尖らせた。

「ハム、細かいわよ。あんただって、本番でなんとかなるくらいのズレだって、隣で聞いてたんだからわかるでしょう」

そのとおりだった。それどころか、たぶん不二夫よりも小巻の才能に驚いていたとすら思っている。しかし、公生はこういうときの引き際が不得手だった。

「不二夫もみんなも、甘くない？ 主演だよ。なんとかなるくらいで、本番いっちゃまずいでしょ」

へらへらと笑って足を投げ出して座っていた塩田が、なんだかまずそうだという顔でそつと姿勢を直し、アルマンドの母親役の宮田みどりが三木の肘をそつと突いた。公生が若手、とくに女に対してはときどき、何がきっかけなのか怒り出すことがあることは、長いつきあいの連中は皆知っていた。

しかしその根本に、公生が極度の人見知りで初対面の相手はとにかく照れ臭く、そして人見知りだからこそ、その怒りを本人にぶつけずにまわりにあたることは、まだ誰も気づいていない。

「ハム」

不二夫がたしなめるような口調で言ったが、公生は今度は副調整室のほうに言った。

「八重樫さん、ちゃんとやないと、逆に彼女の評価下がっちゃうですよ」

小巻はきゅつと唇を噛んだ。鼻先が少ししつんとしてきたが、涙はこ

ぼさないように必死に耐えた。そして振り絞るように言った。

「休憩の間に、ご迷惑おかけしないよう、きちんと全部さらっておきます」

小巻の震える声に、いちばん狼狽したのは公生だったが、その顔を見てしまわぬように副調整室のほうへ顔を向けたままにした。

だいたい収録は、午前中にいまのように通しで行い、チェックと打ち合わせ、昼食を挟んで、2時間後に本番が始まる。

「ハム、そこまで言うなら、お昼、こまちゃんにつきあつて相手してあげなさいよ」

不二夫が場を収めるように、しょうがないわねという口調になって言った。すると小巻は、まっすぐに公生を見てから、深々と頭を下げた。

「よろしければ、お願いいたします」

公生は一瞬で、なぜ若手に説教のような物言いをしてしまったかを後悔し、そしてこれから小巻と2人きりで膝を付き合わせるかもしれないことに照れ、続いてその現場を回避するための、もつともらしい理由を考えた。そして視線を小巻に合わせず、塩田のほうへ向けた。「リリアーナは塩ちゃんとのシーンが多いんだ。塩、つきあつてやんな」

「俺っすか？ いや、かまわないっすよ、というか、いいっすよ。じやあこまちゃん、ランチ、僕とね」

「はい」

小巻はさっそくにやつき始めた塩田にくくりと頷いた。公生はいま、嫉妬の感情が湧き上がりそうな予感がしている自分に驚いていた。

「レディに優しくないなあ、ハムちゃん」

するとスタジオのドアが開いて、そんな声がした。振り返るまでもなく、その飄々としていながら上品な美声は、大先輩の大村正明のものであった。アスコットタイにツイードの上等なジャケット、手にはパイプというお決まりの格好での登場だった。

「正明さん、おはようございます」

公生に続いて、スタジオの全員が立ち上がって挨拶をした。

大村は吹き替えではおもにイギリスの紳士役などを多く担当しているが、ナレーターとしても超売れっ子で、テレビをつけていると1時間番組中に3社のCMから声が聞こえてくることもある。『あの夏の声』に出番はないが、水曜洋画シアターの予告CMは全作品、大村が担当していて、1か月に1度、4本分のナレーションを、本編収録

の昼休み中に、こうして収録に来ている。

「サブでちよっと聞いてたけど、そちらのお嬢さん、若いわりにはお上手なほうでしょう」

「は、はい」

〇歳年上なだけではなく、同業の先輩としての尊敬にくわえ、単純に好きな声の5本指に入る大村にたしなめられると、公生は素直に頷くしかない。若手に戻ったかのような公生の姿に、不二夫が口の動きだけで「いい気味」と笑った。

「お嬢さんも、ハムちゃん、期待してるからこそその苦言だと思って、受け止めてくださいね。でもあんまり細かいところを気にして、本番で声が縮こまってしまうと、もったいないですよ」

「ありがとうございます」

小巻は笑顔になって、大村に頭を下げた。そしてすぐに、その笑みが公生に対して失礼になったかもしれないと思い、公生にももう一度頭を下げた。

公生はそこでようやく、そっと「すまなかった」という顔を小巻に向けた。小巻はその思わぬ公生の仕草に、嬉しくなって両手をきゅっと握った。

大村のナレーション録りのために、全員が昼休憩がてらスタジオを出た後で、残っていた公生は大村に言った。

「正明さん、聞かせていただいてもいいですか」

「私の声なんかでよければ、好きに」

大村は肩をすくめた。最後にスタジオを出るときに、そのやりとりが聞こえた小巻は、思わず振り返った。

「あの、もしお邪魔でなければ、私もよろしいでしょうか」

「お邪魔どころか、お嬢さんのような方に聞いてもらえるなら、いつもより頑張らなくちゃいけないねえ」

大村はパイプを掲げるようにして、小巻に微笑みかけた。小巻は、これから本番まで必死に台本をチェックしなくてはならないのに、大村の声を間近で聞くチャンス逃したくないという気持ちだった。しかし、そう言ってしまった後で、公生に「そんな暇があったら練習しろ」と怒られてしまうかと不安になったが、公生は無言で「勉強になるよ」という顔つきで頷いた。

大村は4本分の映画の、水曜洋画シアターでの次週予告と、他番組中でのスポット予告の15秒ずつ計8本を、1度のリテイクもなく、ぴったりと秒数も合わせて一気に読み上げていった。公生はこういう

特別な声に素直に憧れる。自分がどれだけ巧くなっても手に入れられない、たった一言で空気を作れる声。

そして、大村とはまったくタイプもキャリアも違うが、小巻はそれを持っている。

大村はさらっと、しかし味わい深い声で、これから公生と小巻が収録する映画を語った。

彼女の名前はリリアーナ。少年は、彼女に、彼女の声に、彼女の映画に、恋をしました。夏のナポリ、いつまでも忘れられない、あのひとの唇。水曜洋画シアター『あの夏の声』。次週、映画のひとときをお楽しみに。



日曜日の昼すぎの銀座は、銀座通りの歩行者天国に青と赤と黄色の大きなパラソルがずらりと一列に並び、家族連れからカップルまで、まっすぐに歩けないくらいの人出だった。とくに三越のマクドナルド前の行列は、レジにたどり着くのに何分かかるのだろうというくらいだった。

駐車場は混むので、公生は京急と山手線で有楽町までやってきた。映画の上映まで五分という中途半端に時間ができてしまったので、日劇であらかじめチケットを買ってから、銀ぶらでもするかと四丁目交差点のほうへやってきた。

そのとき、行き交うすべての人が、動きと色を失くした。公生には、そう見えた。

人混みの中で、小巻が公生に気づいて大きく手を振って、小走りにかけてきた。大きなメタルボタンとバックルのついたハイウエストのトレンチコートに、青と白のリボンをあしらった濃紺のキャペリンをかぶっている。公生にとって、雑然とした銀座はその華やかな姿の背景にすぎなくなった。

「松崎さん」

小巻は弾むような声と人懐こい笑顔で、公生の胸に飛び込むくらいの勢いでやってきた。公生はその嬉しそうな唇の形と、そこから覗く白い歯に見とれた。

「安東、くん」

言ったそばから、いちばんつまらない返事をしてしまったと公生は後悔した。しかし小巻は、息を感じるほどの距離で公生に自分の苗字を呼んでもらえたことに、少女のように喜びを感じていた、

「すごい偶然！ お仕事ですか。お買い物ですか」

「いや、この後、映画に」

近くを歩き交う男がときどき、帽子のつばの先の小巻の顔を覗き込んでいるのがわかった。服装もだが、確かに小巻の可愛い容姿は人目を引く。

「私입니다。何をご覧になるんですか」

小巻は、期待を込めて聞いた。

「その日劇で」

「一緒にです！ 『がんばれ！ベアーズ』ですよ」

小巻は体を揺らして子供のようにはしゃいだ。

「うん。え、安東くんも？」

「そうなんです。松崎さん、どなたかと一緒にですか？」

小巻はオフホワイトのテリーヌバッグのバッグから、前売り券を公生に見せながら訊いた。

「いや、一人だけど」

「じゃあ、お邪魔でなければ、ご一緒させていただきませんか」

「それは、いいけど、君は？」

公生はこれから小巻と隣同士に座るのかと少し緊張しつつも、小巻のような女の子が、日曜日に一人でいることが少し不思議になった。小巻はその公生のニュアンスを察して微笑んだ。

「夜、お友達と会うんですけど、映画はいつも、半分お勉強みたいな気持ちで一人です。でも松崎さんいてくださると、先生と一緒にみたいです」

「先生？」

「ごめんなさい。終わったら、映画のことかお芝居のこととか、そのまま伺えるかなって、勝手に想像してしまっていました。松崎さん、お忙しいですよ」

小巻はぺこりと頭を下げた。

「いや、僕は今日、何もないけど」

「じゃあお願いします。映画の後、私も2時間くらい空いちやうんです。おつきあいしてください」

「でも、教えてあげられることなんか」

何もないよと公生が言いかけると、小巻はすぐに首を振った。

「松崎さんと映画のお話ができるだけで、私にはすごい勉強ですよ」  
すっかり小巻のペースだった。しかし、公生にはなぜかそれが心地良かった。

昨日の『あの夏の声』の収録は結果、小巻は完璧だった。公生たちなら気になる台詞のタイミング違いが少しだけあったが、収録が終わると、スタッフとキャストたちから同時に拍手が起こるほどだった。誰もが、主演級を演じられる新人声優の誕生を心から祝った。公生も、リハーサルでの態度の手前、表情は変えなかったが、その拍手につきあった。まわりには洪々に思えたかもしれないが、いちばん小巻の声にすっかり惚れ込んでいたのは、間違いなく公生だった。

大酒飲みのウォルター・マッソーが弱小の少年野球チームを勝利に導く話は、ファミリー向けの印象だったが思った以上に、映画に関する仕事をしている公生にも響くような映画だった。小巻も、ラストシーンはお約束の展開だったがそれでも、思わず歓声をあげたくなっていた。

エンドロールが終わって立ち上がると、公生はなぜか左腕が痺れるような感じがした。しばらくして、それが左隣の小巻にずっと緊張していたせいだと気づいた。

劇場の外に出ると、夕暮れが近づいてきていて、数寄屋橋交差点の不二家のペコちゃんの巨大な電飾と、その向こうに大きな地球儀の形にきらめく森永キャラメル電飾がともに、すでに灯っていた。

とくにあてもなく歩きながら、ひとしきり映画自体の感想を言い合ったりした後で、小巻は公生に「もし吹き替えになるとしたら、誰が演じると思いますか」と尋ねた。そこで公生も、ウォルター・マッソーはこれまでフィックスがいないなと気づいた。

スター級の俳優には日本の声優もだいたい決まっていることが多いく、それをフィックスと呼ぶ。オードリー・ヘプバーンなら池田昌子、グレゴリー・ペックなら城達也、クリント・イーストウッドなら山田康雄、シャリー・マクレーンなら小原乃梨子、といった具合に。しかしウォルター・マッソーとなると、映画でコンビを組むことが多いジャック・レモンなら愛川欽也でフィックスだが、マッソーは作品によって声優がばらばらだった。

公生はしばらく、そんなフィックスのある俳優とない俳優の実例などを出して小巻に語った。小巻は本当に熱心な生徒のように、そんな話を目を輝かせて聞いていた。公生は喋りながら、きつと小巻はこれ

から何人もの若手女優のフィックスになるんだろうなと思った。自身は、二度同じ俳優を吹き替えたことは三回あるが、その俳優たち自体の映画が続かずに、フィックスはまだいない。

「今日のマッソーだと、富田耕生さんが合いそうだね」

「わあ、ぴったりですね。それ想像しながら、さつき見れば良かった」  
見た目や行動は粗野で乱暴だが心根は優しい中年男を、抜群に演じる先輩の名前を公生が挙げると、小巻はこくこくと頷いた。

小巻は公生から直接聞く吹き替えの現場や声優たちの話が楽しくて仕方がなかった。しかし公生のほうは、小巻が20歳にして、例に出す映画もほとんど見ているし、その吹き替えの声優の名前もすべて知っていることに驚いていた。

「どうしようか。この後、食事ならそのへんでお茶でもする？」

晴海通りを銀座四丁目の交差点まで来たとこで、公生は小巻に聞いた。小巻は帽子を右手で抑えて、あたりのデパートの屋上にたなびくアドバルーンを見上げているところだった。公生はその眩しそうな黒目がちな瞳と、丸顔のわりにはシャープなあごのラインに見とれてしまった。

小巻は振り向いて微笑むと、また視線を上のように向けた。そして松坂屋デパートの屋上を見つめたまま言った。

「あそこ、一緒に行ってください」

屋上の半分ほどのスペースは、たくさん小さな子供たちの楽しそうな声で溢れていた。バスや新幹線が前後に揺れる乗り物、跨って乗り線路を走る電車、区切られた中で自由に乗れる子供用自動車、日よけのついたまわりにはコインゲームが所狭しと並べられている。

公生と小巻は、そんな屋上遊園地の風景を見ながら、ベンチに座ってそれぞれコーラとオレンジジュースを飲んでいた。

「子供のころ、両親とデパートに来たとき、ここに来るのがいちばんの楽しみだったんです」

小巻は両足を揃え、宙にぴんと伸ばして言った。視線の先の、母親に抱っこされてパンダの乗り物に乗っている、まだ2歳くらいの女の子に自分を重ね合わせていた。

「松崎さんは、そんなことなかったですか」

「なかったも何も」

公生は思わず笑って肩をすくめた。

「やっぱり都会っ子は違うなって思ったところだよ」

「ご出身は？」

「茨城のすごい田舎のほう。デパートどころか、そもそも屋上がない」公生のその言い方に、小巻も思わず吹き出してしまい、すぐに「ごめんなさい」と表情を変えた。公生は「いいんだよ」という顔で笑った。

実際に公生の生まれ育った町は、単線の駅のまわりにスーパーと呼ぶのものはかれる商店がひとつ、あと店らしき店といえば、蕎麦屋と居酒屋くらいしかない。町の真ん中を突っ切る国道には、学校の前にだけとってつけたようなガードレールがあり、通り沿いの公生の家は、トラックが通ると寝ている夜中でも揺れた。

「安東くんは、すごく都心なんだって？」

「赤坂です」

「すごいな」

「いえ」

小巻はときどきそう言われるが、そのたびになんと答えて良いのかわからずに困惑する。確かに恵まれて育ったと思うが、それは両親のおかげだし、ひけらかすつもりはないが、謙遜するのもおかしい気がする。

父は食品輸入の会社を経営していて、母はアメリカ生まれの日系二世で、パンナムのスチュワーデスだった。母は結婚を機にパンナムを退社、小巻を産み育てたが、いつかはアメリカに戻るのが希望だった。そして小巻の外語大入学を機に、父は母の願いを叶え、日本本社は部下に任せ自分をアメリカ支社勤務とし、二人でロサンゼルスに移住した。

小巻は家族で暮らしていた赤坂のマンションに一人で住み、いまのところ大学卒業後は両親の元へ行く予定となっている。しかし、もし叶うならやってみたい仕事がある。

「今年、どの映画がお好きでした？」

小巻はオレンジジュースを一口飲んで、公生を見た。公生は「うーん」と記憶に残っている映画を頭の中に並べた。

「『カッコーの巣の上で』かな。安東くんは？」

「私はもう、『狼たちの午後』です」

小巻の答えに、公生は思わず顔を覗き込んだ。

「なんか、女の子っぽくないというか」

「そんなことないですよ。あと、アル・パチーノがいちばん好きなんです」

「好みは男のだよ、それ」

「女の子が恋愛ものが好きっていうのは、偏見ですよ」

公生が呆れ顔を向けると、小巻はふくれっ面を作って見せた。

「吹き替え、どなたになると思いますか？」

『狼たちの午後』？ そりゃあ、アル・パチーノは野沢那智さんで決まりだけど」

「ですよ。あとのジョン・カザールとか、どなたがアテたら面白いかなあって、私、映画見た後にそんな想像するのが楽しいんです」

「それも、女の子としては相当変わってるよ」

公生は肩をすくめながらも、小巻に微笑みかけた。

小巻はそこから、「あの方、ぴったりじゃないですか？」「松崎さんは、あの俳優さんに合いますよ」「私も、小さな役でも関わりたいなあ」と、いくつかの最近の映画を挙げては、理想の吹き替えキャストを嬉しそうに語っていった。やはりよく勉強してるし、何よりも本当に好きなんだろうということが伝わってきて、公生は次第に構えずに頬が緩んだままその話につきあっていた。

「ずっと、声優がしたかったの？」

ひとしきりのキャスティング会議の後で、公生は聞いた。すると小巻は、少し困ったような顔をした。

「あの、このお仕事の先輩に、すごく失礼になってしまおうのですが、本当のことをお話ししてもよろしいでしょうか」

「どうしたの改まって。いいよ、言ってみて」

「私、本当の夢は、海外に行くことなんです」

「海外？」

ずいぶん大雑把な話だと思いつつも、公生は小巻に続きを促した。「両親の影響もあるんですが、大人になったらにかく世界のあちこちに行ってみたいって、ずっと思ってたんです。そして、それがお仕事になればいいなって」

「世界のあちこち。なんだろう、スチュワードスとか？」

「母がまさに、パンナムのスチュワードスでした」

「すごい」

公生は感嘆の息を漏らした。いつも自分のアパートの部屋から、旅立っていくパンナムを見ているのは、それこそ公生のほうも子供のころからの憧れがあったからだ、いまは小巻の話を聞くために口を挟むのはやめておいた。

「洋画が好きなのも、その吹き替えのお仕事をいただけて嬉しかった

のも、心のいちばん奥のところでは、世界中のいろんな国や街や人と、間接的にでも触れあえてるような気がしてるからなんです」

小巻はそこで一度、公生の様子を伺った。芝居や吹き替えを、そんな理由でやるなど、怒られるかもしれないと思ったからだ。しかし、公生はふと空を見上げて言った。

「俺も似たようなものかな」

「そうなんですか」

「大学で芝居に興味を持って劇団に入ったんだけど、声の仕事の話が来たとき、なんだか別の嬉しきみたいなのを味わったんだ。いままで言葉にならなかったけど、いま安東くんが言った、外国への憧れみたいなのに、少し近づけたからかもしれないな」

小巻は、松崎の訥々とした語りに、胸がきゅつとするほど嬉しくなっていた。

「となるとあれか。安東くんの目標は、兼高かおるかな」

「そうなんです！」

小巻は少し腰を浮かして、思わず公生の左腕に手をあてた。公生は突然の感触にどきつとしていたが、小巻は気にする様子はなくはしゃいでいた。

「まさに兼高かおるさん、私のいちばんの憧れです」

パンナムが提供の「兼高かおる世界の旅」が始まって、おそらく二年近くが経っているだろう。いまでこそ多少は海外旅行に行ったという話もまわりから聞こえるようになったが、公生が中高生のころ、テレビに映る外国は憧れることすらできない、はてしなく遠い場所だった。

ふと、小巻がタラップを上がってパンナム機に搭乗する姿を想像してみた。それは、きつと海外の人々から見ても可愛らしく、かつファッショナブルに見えることだろう。ただの想像なのに、なぜか公生は日本人として誇らしい気持ちになった。



いつまでも大きく手を振る小巻を見送った後で、公生は三越の地下食品街でスパゲティソースなどを買って、本羽田のアパートに戻ると、午後7時すぎだった。調子の悪いテレビで「アップダウンクイズ」を後ろにつけながら、スパゲティを茹で、温めるだけのソースをかけた。

7時半からはチャンネルを回して、食べながら「すばらしい世界旅行」を見た。「兼高かおる世界の旅」も好きだが、「すばらしい世界旅行」は久米明の独特のナレーションが聞けるのが嬉しい。最近はお笑い番組でもモノマネをされているが、要はそれだけの、誰もがすぐわかる「声」だということだ。

長時間つけていると、テレビ画面の歪みは次第にひどくなっていた。ふだんならこの後はNHKの大河ドラマをつけておくが一度スイッチを切り、9時の日曜洋画劇場に間に合うように風呂に入った。今夜の作品は『荒野の決闘』だ。10年近く前に一度放映されているので、ヘンリー・フォンドはフィックスの小山田宗徳をはじめ、吹き替えのキャストも覚えている。それでも、先輩たちの豪華な共演は何度でも楽しみだった。

風呂につかりながら、さつきまで一緒にいた小巻のことを思い浮かべた。それだけで顔がぼっと赤らんでしまう。公生は体を沈めて、湯のラインを鼻の下にして、その下でぶくぶくと空気を吐き出した。

もつと小巻といろんな話をしたかった。早くまた小巻に会いたい。悔しいがそれが本音だった。しかし、ぶくぶくと息を全部吐ききったときに、公生はそんな小巻への思いに、もつと大きなものがあることに、自分で気がついた。それは、リリアーナを愛したエットーレ、リリアーナに恋い焦がれて懂れたアルマンドと同じ気持ちだった。

僕は、もつと小巻の声を聞きたい。

公生は、もう吐く息がなくなっていることにずいぶん経ってから気づき、どたばたと湯から体を起こし、げぼげぼ、ゼーゼーと慌てて呼吸を整えた。



見たこともない映画を吹き替える夢を見ていた。主人公は俳優の男と、パトナムのスチュワードス。それぞれを演じているのも、見たことがないアメリカの俳優と女優。しかしなぜか機長の役はウォルター・マッソーだった。

アテレコスタジオで、主人公の2人を演じるのは公生と自分。2人は様々なすれ違いに翻弄されながらも、恋を成就させていく。ふと隣を向くと、台本を片手に公生がにっこりと微笑みかけた。

くふふふ。小巻は自分の笑い声で目を覚ました。自分でもちよつと

気持ち悪い声だったので、真っ赤になって唇を噛み、そしてまたシートをかぶって笑った。

小巻の部屋は角部屋で、東側と北側に窓がある。両方のカーテンを開け、寒いのは我慢しながらも北側の窓も開けた。目の前は赤坂御用地で遮るものはない。7階の高さから、真っ青な冬の青空が見えた。パジャマの上にカーディガンを羽織って自分の部屋を出た。両親がいない分、その広々としたリビングに、いまだに寂しさを味わう。

モスグリーンのシャギーカーペット、マレンコの焦げ茶色のソファ、イームスの黄色の椅子と白のリビングテーブル、アルコの大理石から伸びるステンレススチールのランプ。一方の壁には、父のウイスキーなどがそのまま残されたサイドボード、ヤマハの少し古いステレオセットとLPレコードのラック、これもヤマハのアップライトピアノ。

小巻はまずご飯を炊き始めてから、シャワーを浴びて、味噌汁と納豆とししやもの朝食を取った。先週は早起きをして羽田に行ったが、今日は家で台本をおさらいする時間くらいを考えて起きた。小巻は思った時間に起きられるという特技を持っている。念のためにめざましはかけておくが、それを鳴らすことはない。

「愛のテーマ」が入っている面にして、バリー・ホワイトのLPをかけた。台本を覚えたり、勉強のときでも、歌はさすがに気が散るが、インストウルメンタルのレコードは集中力が上がるような気がする。

小巻は、黒のキュロットスカートにオレンジ色のクルーネックカーディガンに着替え、今日はこれに鮮やかな青のベレー帽と茶色のコインローファーを合わせようと考えてから、ソファに座って台本を開いた。先週に続いて、今日の水曜洋画シアターでも役をもらえた。先週は主演だったが、今回はヒロインは清村恵美で、小巻はその友人役だ。それでも光栄だし嬉しい。そして、台本にもう一度目を落とす。そこには三番手の役に「松崎公生」とクレジットされている。

一週間前に初めて会えて、次の日は銀座で偶然出会えた。あれから、公生のことばかり考えているような気がする。目の前で話ができたときに、小巻は密かに望みをひとつ叶えていた。

松崎さん、やっぱり素敵な声だったな。

くふふふ。また、おかしい方をしてしまい、小巻はぐっとそれを抑えて背筋を伸ばすと、自分の出番のページを開いた。



番町スタジオへは、小巻の家からはアクセスが悪い。番町に近い麴町に二年前に駅ができたが、半蔵門線の延長計画はまだ先らしく、小巻は赤坂駅から千代田線、国会議事堂駅で乗り換えて丸ノ内線で四谷で降り、そこから一五分ほど歩いてスタジオに入った。

「おはよ、こまちちゃん」

早く来たつもりだったが、すでに先にいた恵美が手を振った。

「恵美さん、おはようございます。お早いですね」

「だって、今日の台詞多いんだもん」

恵美は台本を手にむすつとした顔を作ってみせた。もちろんその顔は冗談だが、確かに最初から最後まで喋りっぱなしの役だ。

殺人事件の現場を目撃してしまった女。彼女は警察に届けるが、それでも何者かにつけ回されるようになる。担当の刑事は彼女を保護するふりをしながら、彼女をエサに犯人を捕まえようとする。このヒロインは美人だが気性が荒く、そんな刑事に罵詈雑言を浴びせ続けるのだ。

恵美はこういった、美人だが攻撃的、あるいは魔性の女やはずっぱな女を得意としている。小巻はそんなヒロインが部屋に転がり込んでくる女友達の役で、公生はヒロインをつけ回す謎の男の役だ。

他のスタッフや声優たちが集まり始め、集合時間の一五分前に公生はスタジオ入りした。

「松崎さん！」

「ああ、安東くん」

「おはようございます」

「うん、おはよう」

恵美たちが声をかける前に、小巻が弾けるような挨拶をして、公生もまんざらでもなさそうにそれに応えた。恵美はその様子に、少し驚いた顔を向けた。先週の明らかに機嫌悪そうに接していた公生でも、遠回しに説教をされていた小巻でもないから当然だった。他のメンバーは前回はおらず、八重樫と疋田は副調整室で打ち合わせ中だった。刑事役を演じるベテラン、道家敬次がスタジオ入りしてきて、全員が立ち上がって頭を下げた。

「ハムも恵美も、ずいぶん久しぶりだね。半年？ 1年？」

「ごぶさたしております」

本当は3か月ぶりだが、公生は指摘せずに挨拶した。したし恵美は腰に手をあてて口を尖らせた。

「敬次さんひどい。先月、浜町スタジオで一緒にしたじゃないですか」  
「だったかな。それだけ、可愛い恵美に会えない時間が寂しかったってことだよ」

「じゃあ、許します」

恵美はぷつと吹き出した。道家は小巻に目を向けた。

「で、こっちにも可愛い子が。君が、小巻ちゃん？」

「はい。はじめまして、安東小巻です。今日はよろしくお願いいたします」

「はいはい、こちらこそ」

そこで道家は小巻を見つめたまま公生に聞いた。

「ハム、先週一緒だったんだろ。どう、こちらの新人さん」

「どう？」

「ごめんね、俺、まだ小巻ちゃんのアテたの、見てなくてね。ハムから見てどうだった？」

道家は最初は小巻に、途中から公生に対して言った。小巻は緊張して、人には気づかれないくらいに唇をきゅつと噛んだ。公生には先週、ずいぶん叱られた。しかしその翌日は、打って変わって優しく話をしてくれた。いま、先輩に向かってどう自分を評価するのだろうか。

「新人ですからブレスやタイミングは多少あれでしたけど、最終的には良かったですよ。なあ？」

公生はそう言うと、恵美に同意を求めた。すると恵美は首を横に振った。

「私は最初から、こまちゃん上手だって言ってたわよ」

「そう、だっけ」

「そう。文句言ってたのは、ハムさんだけ」

「いや、それは文句と言うか、違うよ、アドバイスって言うか」

恵美に強く言われ、公生はたじたじになりつつあった。すると小巻が、にっこりと二人に笑いかけた。

「はい、いただいたアドバイスで頑張れました。まだまだだったかもしれませんが、松崎さんと恵美さんのおかげです」

小巻のまっすぐな言葉に、公生はますます返す言葉を失い、恵美は「ありがと」と口の動きだけで小巻に伝えた。

「なんか、聞いてた話と違うなあ」

すると道家がのんびりした口調で言った。皆が道家にその意味を聞こうと顔を向けた。

「だって、ハムがまた、若い女優泣かせたって、業界中で噂だったよ」

「泣かせてなんか、それにまたって、え、噂ですか？」

公生は慌しどろもどろになった。隣で小巻も「そんなことないですよ」というように、顔の前で手を振った。恵美は口を抑えて笑いを堪えた。

「誰ですか、そんな噂を道さんにまで広めてるの」

「それは、情報提供者の権利のために言えない」

道家は、まさに今日の映画の台詞をそのまま役の口調で言った。そしてにやりと笑った。

「道さーん、ハムったらまた若い子いじめる悪い癖、ひどいのー、わたくし信じられないー、って言いにくた奴がいたなんて教えられないな」

スタジオ中の誰もが不二夫の顔を思い浮かべ、公生は大きくうなだれて、他の皆は大笑いした。

収録が終わり、駐車場へ向かう通路で、道家が公生の肩を揉みながら言った。

「ハム、さつき見たけど、まだあのスバル乗ってたのか」

「はい」

「もういいかげん、ポンコツだろ」

「そんなことないですよ。ちゃんと走りますよ」

「部屋も変わらず？」

「羽田です」

「え」

二人の会話に、その後ろの小巻が思わず声をあげた。公生と道家は同時に振り向いた。小巻は自分の大声に照れつつも、公生の目を見つめた。

「私、羽田空港に行くのが趣味なんです」

「趣味？」

「趣味って、変ですね。あの、羽田に行って、デッキで飛行機を見るのが好きなんです」

公生は、小巻は母がパンナムのスチュワーデスで、海外に憧れているという話を聞いていたので、その話は自然と納得できた。しかし道家はおかしそうに小巻の顔を覗き込んだ。

「変な趣味」

「です、よねえ」

「冗談冗談。いいじゃない、お気に入りはどこ？　ダグラス？　ボー

イング？」

「パンナムの、ボーイング707がいちばん好きです」

「わかってるねえ。僕も747より707のほうがカッコいいと思うよ」

「ですよね！」

小巻はぴよんと飛び上がって手を叩いた。道家は笑みを浮かべて公生に言った。

「やっぱりこの子、変わりもんだね」

「だと思えます」

「そんな、ひどいです」

小巻は公生と道家にふくれっ面を向けた。

道家がジャガーに乗って帰るのを見送ってから、公生は言った。

「でも、僕が本羽田に住んでるのは、安東くんの原因に近いよ」

「そうなんですか？」

「子供のころにさ、親戚のおばさんがハワイ土産でマカデミアナッツチョコレートをくれたんだ。それも嬉しかったんだけど、その袋にパンナムの宣伝用パンフレットが入ってたね。もう朝から晩までそれを眺めてた。飛行機の近くに住みたいって、そのころから思ってたんだろうな。すっかり忘れてたけど、安東くんに会ってそんなことを思い出したよ」

公生の言葉に、小巻は嬉しそうに頷いた。そして首を傾げて言った。

「ねえ松崎さん、一緒に、羽田空港に行きましょう」



近くに住んでいながら、公生は羽田空港自体にはほとんど来たことがなかった。

そもそも公生のアパートの近くに京浜急行の羽田空港駅があるが、これは名ばかりで、実際の空港はその駅から埋め立て地への水路と環状八号線のはるか向こうだ。いざ空港に行くにはとても不便な場所だった。

なので公生はその日、徒歩ではなくスバルで空港へ入った。

1976年12月23日。この日は公生の30歳の誕生日だった。

階段を上って見学デッキへ出ると、エプロンには日航機と全日空機、そしてルフトハンザ機が停まっているのが見えた。思った以上に間近

で、けっこうな迫力があつた。

平日の昼過ぎだがたくさん見物客がいた。しかし、その中で小巻を見つけるのは簡単だった。髪は黄色のリボンでツインテールにしている。細身の白のスキニーパンツの裾をブーツに忍ばせ、白のセーターの上に、襟と袖にボリウムのあるフアーを施したジャケットをウエストベルトで絞っている。その颯爽とした姿に、男だけでなく女も何人かが振り返っていた。

小巻もすぐに公生に気づき、ぱつと笑顔になって手を振った。公生も思わず、その笑顔に頬が緩んだ。

「土曜の夜は羽田に来るの」

なんだか普通の挨拶をするのが照れ臭くて、公生は小巻の前に来るなり言った。

「今日、木曜ですよ？」

「いや、そういう歌があるんだ。知らない？」

「知らないです。誰ですか？」

「ハイ・ファイ・セット」

昨年出たシングルのB面なので知らなくても当然だった。公生もラジオコマースシャルの録音で、西新宿の高層ビルにあるFM東京に行ったときに、たまたま流れているのを聞いて覚えていた。旅が好きだった男の面影を探し、羽田に来る女の歌だ。さらっと聞くと、別れた男への未練のようにも思えるが、じっくり聞くと旅先で亡くなった恋人を想う歌にも聞こえてくる。

小巻にせがまれて、公生はあまりうまくないが小声で覚えている範囲を歌ってみせた。すると小巻は小さくぱちぱちと拍手をした後で、物思いに耽るような顔つきになった。

「せつないなあ。でもわかるなあ」

「アメリカに恋人が帰っちゃったことがあるとか」

公生はなんでもないように言った。すると小巻は目を丸くした。

「なんで松崎さんって、なんでもわかるんですか」

「え」

「え？」

公生のほうは、「そんな恋人いないですよ」と笑わせるために言った冗談のつもりだった。しかし、まさかの正解で、驚いているのは小巻よりも公生だった。小巻にかつて恋人がいたことも、よく考えれば不思議なことではないが、改めて知るとショックだったことは間違いなかった。しかもその相手がアメリカ人となると、公生はやはり小巻

は育ってきた環境から違うんだよなと、嫉妬以上に諦観のようなものまで感じてしまった。

小巻は公生の戸惑いの意味がわからずに、その顔をじっと見つめていた。公生は「なんでもないよ」という顔を作って、小巻と一緒に欄干にもたれて滑走路のほうへ目をやった。

ハイライトに火をつけると、小巻が「ほらほら」と空の彼方を指さした。

公生が目を向けると、そこに小さなきらりとした光が見え、それはすぐに飛行機の形となって近づいてきた。やがて緑色のロゴと尾翼が見えて、キャセイパシフィック航空のロッキード・トライスターだとわかった。斜めに降りてきた機体は、空港中にブレーキとジェットエンジンの音を響かせて滑走路に滑り込んだ。遠足なのか小学生たちの団体から歓声が上がった。

「着き心地、さわやか。キャセイパシフィック」

「広川太一朗さん」

公生がふと、コマースシャルのキャッチコピーを読み上げると、小巻はそのナレーションを語る名声優の名前を嬉しそうに口にした。「愛のテーマ」が流れるそのCMは、ともに大のお気に入りであることは、まだ互いに言っていないかった。

「お父さんと同じ匂い」

キャセイ機がエプロンのほうへ旋回してくるのを見つめたまま、小巻は呟くように言った。公生が顔を向けると、小巻は公生の口元に目をやった。

「ハイライト。お父さんも同じのを吸ってました」

「意外だな」

「なぜですか」

「いや、安東くんのお父さんだったら、マルボロとかキャメルとか、洋モクを吸うだろうっていま勝手に思っちゃってね」

どんな人なのはわからないが、少なくとも海外経験が多いブルジョワが、こんな庶民的な煙草を吸うのがなんとなく想像できなかった。

「1本、いただけますか」

「吸うの？」

公生はパッケージを振って1本飛び出させて、小巻に向けた。小巻はそれをくわえ、公生がつけたジッポに顔を近づけた。そしてハイライトの先に火がつくなり、げほげほとむせた。

「大丈夫？」

公生は小巻からハイライトを半ば奪うように取り上げながら言った。本当は背中をさすってあげたかったが、それはあまりに馴れ馴れしいような気がして我慢した。

小巻はひとしきり咳き込むと、目に少し涙を浮かべながら「ごめんなさい」という顔をして笑った。

「ブリジット・バルドーやアンナ・カリーナって、本当にかっこよく吸うじゃないですか。ずっと憧れてるんですけど、どうしても吸い込めないんです。子供、ですよ」

小巻はバッグからハンカチを取り出し、目尻の涙をすつと拭いた。公生は火のついた煙草を2本持っていたかもしれないので、小巻にあげたものを地面に落として、靴のかかとで消した。しかし消すときに、フィルターに小巻の口紅がついているのが、なぜかとてももったいなく思えた。

「松崎さん、昨日四ツ木さんとご一緒したんです」

「さぞうるさい現場だったろうね」

公生は不二夫の顔を思い浮かべる仕草をして、肩をすくめた。

「とつても楽しかったですよ。でもすごいですよね。昨日は2枚目の物静かな役だったんですけど、ふだんと全然違うのに、もうその声にしか聞こえませんでした」

様々な役を演じる声優は多いが、不二夫はとくにその守備範囲の広さが持ち味のひとつだった。爽やかな好青年も、はしゃぐ少年も、ときにはロボットの機械音まで担当することがある。

「そうそう、それで四ツ木さん、松崎さんが吹き替えの台本をすごくいっぱい持っていていらっしゃるって教えてくださったんです」

「自分が出たのはもちろんだけど、スタジオに置きっ放しにしてあるのとか、片っ端から集めてた時期があってね。さすがにもう棚がパンパンでやめてるけど」

「ああ、何か読んでみたいなあ」

「好きだったの、ある？」

「そうだなあ。『オーシャンと十一人の仲間』は？」

「やっぱり安東くんの趣味は渋すぎるよ」

公生は思わず笑った。

「持つてるよ、シナトラは家弓家正さん、デイン・マーチンは羽佐間道夫さん、サミー・デビス・ジュニアは内海賢二さん」

「読んでみたいなあ。あ、じゃあ女の子っぽいこともちゃんといいます。たとえば『男と女』って好きなんですけど、去年、月曜ロードシ

ヨーでやりましたよね？ 私、見られなかったですよ」

「持つてるよ。西沢利明さんと小沢寿美恵さん」

「ああいう、台詞の少ない映画って、逆にすごく気になります」

「じゃあ今度、持って来ようか」

公生は何気なく言った。言いながら、これが次に小巻に会うきっかけになればいいなと思っている自分に気づいていた。

「本当ですか。嬉しい。あ、じゃあ松崎さん、ジャン・ルイ・トランティニャンとアヌーク・エーメで練習させてください」

「練習？」

「実際の台詞、お芝居でしてみたいです」

「それはさすがにやったことなかったな。面白そうだね」

「わあい」

小巻は子供のような笑顔になった。そしてさらに、何かに気づいたようではっと顔を輝かせると、公生の腕を両手でぎゅっと握った。公生はその小さく柔らかい手の感触に、ぞくぞくと腰のあたりに痺れが走った。小巻は腕をつかんだまま、空を見上げた。

「来ました、パンナムですよ」